設立　平成24年　5月15日
開塾　平成24年　9月　8日
発行　令和　2年11月14日
（91号）

中之島ニュース

［事務局］　〒648-0094
橋本市三石台4-1-15
TEL　0736-38-3669
FAX　0736-38-3680
発行　學塾・中之島事務局

人間学講座
第96講

「令和時代の祈る生き方」

特別講話　中川千都子副代表

■十年後の生存率

二〇一九年、昨年の大晦日は特別な感慨を持って迎えました。何故ならその十年前である二〇〇九年、闘病中だった私は、主治医から手術後に「十年後の生存率」を聞かされていたからです。そのごく僅かのパーセンテージは自分の胸に収め、今も家族にも明かしたことはありません。大切なことは、今ここを良き力にあふれて生きること。「こうなったら不安だ」とまだ来ぬ未来にびくびくしながら、今ここにある恵みや素晴らしい宝を見落としたり、諦めたりしたくない、そんな思いでこの十年を過ごしてきました。愛する家族にも同様の思いでいて欲しいと思っていました。

振り返れば、これまでに六回の癌を発症し、手術や治療を受けてきました。いずれも原発性の癌で、部位はそれぞれ違います。医師によると珍しいケースであるとのこと。さらに珍しいのは患者が前にも増して元気なことでしょう。現在なんら医療処置は受けていませんが、お陰さまで今日も元気に皆さまの前に立つことができています。

■人生好転の法則

最初の癌は二〇〇六年です。そのときは「なんで自分がこんなことに！」と天を怨みました。なんの罰なのだろう、と。病巣は右乳房にあり、直ぐにでも切除手術が必要でした。おっぱいは女性の美しさの象徴です。それを失うことの言葉にできない心の痛み、手術後のいつまでも癒えない肉体の痛み。また当時勤め先では管理職として部下たちを束ねていたのですが、長い病欠という期間に社会から取り残されてゆく痛み。自分の価値が瞬く間に損なわれてゆくのを感じました。元来明るく陽気だった私は一気に塞ぎこみ、鬱といわれる状態になりました。何を食べても味がせず、体重はどんどん減る一方。家族は優しく労ってくれるのですが、それも煩わしく思うほどに心は歪んでいました。

私は小さい頃から頑張り屋で負けず嫌いな性格です。努力すればなんでも手に入ると思っていましたし、たいていのことは思い通りにしてきたように思います。けれどもそれで充分幸福感に満ちていたかといえばそうでもなく、私の中にはいつも「このままじゃだめ、もっともっと」と後ろから炎が追いかけてくるような焦燥感が常にありました。

なんで自分が癌になったのか？さまざまな理由から人は病と出合うのでしょうが、私の場合は顧みれば、いつも自分の外側ばかりを見ていて、競争や比較を生きてきたこと、つまりは、自分の内側を見つめてこなかったことに起因するのではないか。いつもいつも私は自分の外側にあるものばかりを求めていたのです。そんな私にきっと神様が「ちょっと立ち止まって考えや」と病気の機会を下さったのではないかと思うのです。

身体も心もどん底の最中に、天分塾（人間学塾の前身）の先輩である故島田富美子様から励ましの手紙と一冊の小冊子が届きました。その本には、何があったとしても「ありがとうございます」の言葉を使うことが人生好転の法則であることが書かれていました。以前の私なら手にしない本かもしれません。しかし、その時の私は万策尽きた状態でした。健康に戻りたい一心から、また頑張り屋の癖で、あらゆる健康法・食事法・体操等をがむしゃらに試すも効果の無さに挫折を繰り返していた時期だったのです。

本から顔を上げるや決意しました。言葉を変えること。大いなる調和の言葉「ありがとうございます」しかない。この日を境に私の使う言葉が変わりました。言葉を変えると見える景色が変わり、人間関係も起こる出来事も変わり、気がつけば人生観・価値観が変わっていました。幸せとは手を伸ばして外側にもっともっとと求めるものではなく、今ここの私にこんなにもある！と目覚める体験でもありました。

■「ありがとうございます」の言葉

「ありがとうございます」で、なぜあらゆることが変わってゆくのか調べていくと日本語に宿る「言霊」に行き着きます。「あ」から「す」までの十音字が単なる「感謝」の意味を超え、実は宇宙の叡智と全ての調和、発展を意味する真言であると知ったとき、心から日本人であり、日本語を使えることに感謝と誇りを覚えました。

祈りとは全ての宗教にある行為ですが、この「ありがとうございます」を心の中で常に唱えることもまた祈りです。日本人はお天道様に恥ずかしくない生き方をしたいと心のどこかで思っているもの。祈りとは「意宣（いのり）」で、お天道様の意志を宣言することです。お天道様は神や、宇宙の摂理と言い換えられるでしょう。それは目には見えないものの明らかな意志がある。天の意思とは、それぞれが和して全体がより良くあることではないでしょうか。そして言葉は天に繋がるための道標となってくれます。あらゆる意味で混乱を極めている今、大きな和の民族～私たち大和民族が世界で果たしてゆく役割は大きくなってゆくことと感じています。

（抄録　中川千都子）

※（お詫び）

十月講座は、コロナ禍の影響もあり、講師との連絡に不都合等で来講頂けませんでした。よって急遽中川副代表に講話頂きました。

《感動語録》

◆講師　中川千都子副代表
「令和時代のいきる生き方」
◆進行　山路直美世話人

・言霊（プラス言葉をつかう）
　言葉一つで人生が変わる
　中川さん …病気が治る
・陰と陽
　中川さんのエネルギーが強いプラスに転換した
・自分で実験（体験）しないと肚に落ちない
・おは陽のことば・おは陰のことば
・自分は光としていきる（プラスの生き方）
　世の中を照らす → 世の中を良くする
・言葉と行動と思いを変える
・「ありがとうございます」のことば
・起こったことは全て必然
・ことばが気持ちを変える
・病気になっても病人にならない
・ことばに脳が引っ張られる
・良いことば・温かいことばが気持ちを変える
・願いと祈りのちがい
・言葉が先　心が後
・ありがとうという言葉は、心の血液
・日本語の五十音が持つ音霊（父音・母音　太陽と月）
・神の意図をくみ取る
・信じる力と実行する力
・一斎必然→プラスに向かう神さまからのメッセージ

《大悟徹底》　寺田一清先生寄稿録

「秋の郊外学習は、「実践人の家」へ」

今年の郊外学習は、森信三先生の旧宅である「実践人の家」を訪ねることになりました。これも鈴木塾頭の切なる願いからであります。思えば五年ぶりのことでありましょう。

一般社団法人「実践人の家」の事務所は、多勢の参加者を迎えるにふさわしい所でなく、まことに手狭な所でありますので、一〇名足らずの方たちならばいざ知らず三〇名を超える人たちを迎えるに必ずしもふさわしい所ではございませんので、なるべく避けたいという思いもなきにしもあらずでした。しかし鈴木先生の念願に抗しがたく、そのご要望に添って、先日宮本眞弓氏を共にお願いと準備をかねて、その事務局を訪ねお許しを得ました。と同時に、立花駅前の市立プラザの一室も予約し、研修会場も確保いたしました。その日の行事日程は別記案内の通りですので、ご参加のほど願っております。

ところで私は幸いなことに、ご生前の森信三先生に三八歳の時から二七年間にわたり、身近にその警咳（けいがい）に接することができました。そしてその間一五年にわたり常務理事を務め、毎月発行の「実践人」誌の発行や、夏・冬の「研修会」の立ち上げにも尽力してまいりました。その他、森信三先生晩年の著書のまとめとして『幻の講話』や『新全集』の発行、契縁録・余光録その他、生誕一〇〇年の記念行事等々思えば、家業のかたわら微力を顧みずよくぞ精一杯、努めさせていただいたものと思われてなりません。

そして七〇歳をもって引退し、その切り替えとして、四国八十八カ所歩き遍路に七月一日より、三八日かけて一歩々々歩かせていただきました。その後鈴木・西中両先生のお誘いをたまわり、一九九八年以来、天分塾顧問として参画させていただいてまいりました。思えば誠にありがたい極みです。

「天分塾ニュース」平成23年11月掲載より

《凡事徹底　一日一語》

●掃除一筋

人生八十五年、「掃除一筋で生きてきてよかった」とつくづく思います。後悔していることは何もありません。

掃除をしてきたことによって、時間や身体や人生をムダにしたなどとはまったく思いません。「やってきてよかった」と実感することばかりです。

むしろ、「もし、掃除をしてこなかったとしたら…」と考えると、不安になるくらいです。

●底力

人間は不思議なもので、真の底力が身につくと自信が湧いてきます。

自身が身につくと、人に対して寛容になり、小さな喜びにも敏感になります。

また、それに比例して、忍耐心が強くなります。よいことばかりです。

ひとえに、底力が包容力を育むからです。その底力を身につけるには、まず自らを磨くのが先決。

その実践として掃除が有効です。

●「五省」

海軍兵学校の「五省」を紹介します。

①至誠に悖るなかりしか
②言行に恥づるなかりしか
③気力に缺くるなかりしか
④努力に憾みなかりしか
⑤不精に亘るなかりしか

軍国主義とは関係なく、日本のこうしたよい伝統を活かしていけば、人の感性や節度も保たれ、社会の秩序も安定することと思います。

《森信三先生に学ぶ「陰徳下座の行」》

人生二度なし教でありゴミ拾い宗

最近、発行された伝記作家小島直記先生の著書『素敵な人、キライナ奴』の中で、二章にわたり、森信三先生のことがわかりやすく述べられており、肩書きを超えて真実の道を歩み抜かれた人としてご紹介いただいています。その中でわたくしの住所氏名まで記されて、『一日一語』と『不尽片言』の二冊をご推奨いただきましたので、多くの読者の目に触れ、お申し込みのハガキを数多く受け取りつつあります。

さて森信三先生のことを一言でお伝えすることは至難なことですが、まず第一に国民教育者の師父とも仰がれる方と申し上げたいと思います。満州建国大学より死線を越えて引き上げ帰国せられて間もない頃、自身の言葉として、

「学者にあらず、宗教家にあらず
はたまた教育者にあらず
ただ宿縁に道びっかれて
国民教育者の友として
この世に生を終えむ」

と決心覚悟のほどを記されています。

この一語を深く味わえば味わうほど、この一語に森信三先生の全てが秘められているように思われてなりません。むしろわたくしには、真実の学者であり、宗教者であり、教育者と思われてならぬのです。また数多い学者の中でも先生ほど世の辛酸苦労を味わわれた方も少ないのではないかと思えます。

またご自分の著述よりも、縁ある方々の書信を優先せられました。また受け取った封書は必ず例外なくハサミで開封せられた一事も忘れることはできません。住所版を押されたハガキ四，五十枚は常に座石に置かれ、直ちに一筆呈上され「マヒの右手にて九十五歳　不尽」としたためられました。「不尽」とは、森信三先生の雅号です。道は限りなく続く。求道は尽きることはない――という意味です。

言い方を換えますと、類のない求道者であり、伝承者であり、また稀代の哲人とも言えましょう。また先生の一枚看板は、「人生二度なし」であり、先生の念仏であり呪文であると思えるほどです。またある時、「わたくしの宗教は、ゴミ拾い宗とも言えましょうかねえ」と破顔一笑せられたこともあります。それほど、紙屑が目につき拾わずにおられなかったようです。

かって神戸大学ご奉職の七年間、教官室から教室までの廊下の紙屑は、例外なく拾い続けられました。しかもただの一度も学生に拾いなさいとは言わず、むしろ学生から侮蔑の視線を受けながらも、定年退官最後の日まで続けられたとのことです。

★廊下の紙屑というものは、これを見つけて拾ってやるまで、いつまでもそこに待っているものです。もっともこれは平生紙屑を拾うことに努めている人だけが知っていることなんですが――

★足元の紙屑一つ拾えぬ程度の人間に何ができましょう。足元の紙屑を拾うのは、下座行の第一歩です。

礼を正し、場を清め、時を守る

わたくしは、昭和四十年二月、三十八歳の時、初めて森先生にお出会をいただきまして以来、いろいろとお教えいただき導かれました。ではいった何を学んできたかと反省しますと、まことに数え切れないことで挙げればキリのないことですが、要約すれば、「宇宙の哲理と人間の生き方」といえるのではないかと思えます。言い換えれば、「原理原則と日常実践」とも言えましょう。

いまその中の「宇宙の哲理」について詳しく述べる誌面がございませんので、①調和バランスの理と、②循環変動の理、そしてこの二大原理から導かれる③根源統一生命の理とのみ申し上げておきましょう。

ところで、人間の生き方、社会集団の在り方、人間形成に関して等々、簡潔に明示くださっていので、大いに快刀乱麻を断つ爽快さをもって教えられることしばしばです。

いまその一つを取り上げますと

★一、礼を正し
一、場を清め
一、時を守る

これ現実界における再建の三大原理として、いかなる時・処にもあてはまるとみてよい。

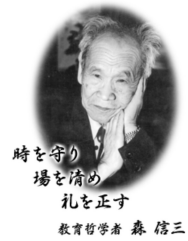
★心を正そうとしたら，まず体を正し物を整えることから始めねばならぬ。クツをそろえること一つが、いかに重大な意味をもつか、わからぬような人間は論ずるに足りない。

と仰せのように「家庭教育の三つの躾け」としても、

一、朝のあいさつのできる児に
一、呼ばれたら「ハイ」と元気よく
一、脱いだ履物はそろえる

この三か条を挙げ、この三つさえ躾けられたら，人間としての軌道に乗せることができると仰せです。

「師教を仰ぐ」　森先生に導かれて
寺田一清 著より抄録



《人間学塾・中之島》

■ 平成２年12月カリキュラム

＊日時　12月12日（第２土曜）
　　午後１時～５時

＊場所　大阪大学中之島センター（10Ｆ）

＊講師　上甲　晃先生（志ネットワーク代表）

1941年 大阪市に生まれ。1965年松下電器産業（株）に入社広報、販売を担当。1981年財団法人松下政経塾に出向。理事・塾頭を歴任。松下政経塾は、来るべき21世紀のリーダーを育てるため、松下幸之助氏は私財約70億円を投じて1980年に創設。この松下政経塾で、人材育成に携わる。教務部長、塾頭、副塾長、常務理事を経て、1996年退社し志ネットワーク社を設立。1997年『青年塾』を創設。これまで培った経験を生かして「志ネットワーク」を設立し、代表に就任。これからの時代にマッチした教育をさらに追求。“志の高い国づくり”は、日本人一人ひとりが志の高い生き方をすることから始まるとの考えに立ち、現在第23期生を迎え、累計約二千名を超える。主な著書『志のみ持参』『人間として一流をめざす』『志を教える』『志を継ぐ』など著書多数。

《読書感想文刊行案内》

※ 第九期「文集」冊子への原稿提出のご案内 !!

良書との出会いは、人生を一変させます。
「聴いて一歩前進、書いて三歩前進」
読書は、自分の中に「信」がねづきます。
・選定図書は、自由に選んでください。みなさんに是非紹介したい書籍を選んでください。

◇ 文字数　１２００文字以内で…原稿用紙３枚
◇ 締　切　令和三年一月一五日必着
◇ 提出先　學塾・中之島　事務局
◇ 発　行　令和三年三月予定

《寸　言》

「本（もと）を立てる」

木南一志氏

命のつながりを辿る。
おとうさん、おかあさん。
おじいちゃん、おばあちゃん。
そして、
ひいおじいちゃん、ひおばあちゃん。
たくさんの先祖のおかげで今がある。
こうして生きているのは、
自分の力だけではないのだ。
生かされていると言われるのは、
先祖があるから。
自分の力だけで
生きてきたわけではない。
多くのご縁やいのちのつながりのおかげ。
本立ちて　道生ず
一度きりの人生の道
本を立てることから始めたい。
有り難いことなのだ。

月刊誌「実践人」11月号より

《感動語録》

看取り士日記
～不安を愛にかえて～

柴田久美子氏

若葉が目に眩しくキラキラと輝く頃、新しい相談をうける事になった。担当医から余命宣告を受けて、お母様が望まれていた自宅での旅立ちに向けてご家族様は動き始めたので、サポートして欲しいとの事。自宅に連れて帰ろうと決意はしたものの、旅立たれる方を連れて帰るという大事に加えて、様々な処置を実行するということに多くの不安があったのだろう。初めて施設に伺った際には、私たちの存在に安堵された様子だった。

２回目の訪問は、介護タクシーで戻られたご自宅へ。お母様８４才は緊張感の取れた優しい表情だった。早速ご家族は、施設の看護師から教わった胃ろうからの栄養と水分補給、そして、痰の吸引を実践されていた。ベッドは居間の真ん中におかれ、家族の動きや、会話、食事をする風景が感じ取ってもらえる。お母様が望まれていた時間がそこにはあった。
認知症の進んだお父様も同時に外泊をし、お母様を囲む。ベッドで一緒に横になりながら過ごす時間も設けた。1週間の外泊を終えて、一旦施設に戻る。２回目の外泊のあと、ご自宅で看取る意志をご家族はさらに固めて、施設に戻る事を止める事にした。

新しい週を迎える日の朝方のこと、長男さんが寄り添っていたところに、お父様がふと起きていらっしゃって一緒に寄り添う事に。二人の会話を聞きながらお母様は静かに息を引き取った。